

ハイスクールD×D～
降臨せしは黒き無限の
王～

エアーミリ- 2

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

その日世界に新たなる無限が現れた。

真なる赤龍神帝も

無限の龍神をも圧倒する無限。

彼はこの世界で何を得て何を与えるのか。

目

次

幼少期

胎動

赤き龍の帝王

紫藤イリナ

出会い

23 11 5 1

幼少期

胎動

次元の奥底、その深遠にして最下層部。

光を拒み、神すらも立ち入る事ができない何者をも寄せ付けぬその場所で彼の者は生まれた。

その身に無限を宿し有象無象その全てを破壊するものが。

彼は次元の壁を越え世界を渡り歩く力を有していた。

彼は数多の世界を渡り歩き、世界からありとあらゆる知識を吸收、成長を遂げた。

そして数多の世界で数々の経験をした。

ある時は絶対的力を持つ魔王として。

ある時は全てを破壊する破壊の神として。

またあるときは妖の頂点に立つ黒き九尾の狐として。

数多くの出会いを、そして経験を糧とし成長した彼は新たな世界へと向かう。

新たな世界は彼に何を与えるのか……。

「おぎやああああ」《む?》

「生まれたわ!」

「おおつ! 我が息子よ!!」

新しき人生は「人間として」だつたようだ。

「ふう……」

私の名はアキハ。

この世界に生を受け一年たつた。

時間の流れとは案外早いものだ。

今までにはほぼ無限に時を過ごせたから気にしてはいなかつたが。

兵藤家に生を受けた私は「兵藤秋葉」と言う名を貰つた。

両親は何処にでもいるような唯の人間であり、そんな両親から生まれた私も今は唯の

人間だ。

いや、正確には『身体は』唯の人間と言つた方が良いかも知れない。

しかし例え身体が人間であつても私は無限と言う存在であり、私は私だ。

それ以上でも以下でもない。

しかし私を唯の人間と言つてもいいのだろうか？

先に言つた通り人間になつたとは言え無限の存在である事に変わりはない。

無論無限力だつて使用できる。

そんな力を内包することははつきり言つて普通、人間では無理だ。

神か魔王クラスの耐久力がなければ身体が無限力の負荷に耐えられず木つ端微塵になつてしまふ。

つまりこの身体はそれらと同等の耐久力があると言うことか？

「まつ、そんな事はどうでもいい。どうであれ私は私、それが変わることはない」

昔から、そしてこれからも。

「それにしてもこの世界は中々平和だ」

前の世界と比べれば平和だろう。ただし今は、だが。

この街だけでも悪魔や墮天使の気配がちらほらする。

「……力もまだこの身体に馴染みきつていない。能力の確認をしながら修行しておくべ

きか」

身体の幼さ故にまだ力が完全に馴染みきつていかない。
それを馴らすためにも修行を行つた方がいいだろう。前々からの日課でもあつたから丁度いい。

それにいざという時力が使えないなど目も当てられん。

「さてこれから忙しくなるな」

「私が望むのは平穏。それを邪魔するのなら全てを破壊するだけだ」

私はそう言つてにやりと笑う。
ああ…楽しみだ……

赤き龍の帝王

「……どうなつてているのだこれは？」

次の日秋葉は啞然としていた。

遡る事数分前。

秋葉は早速修行を始めようとした。

しかし一つ問題が起きた。

それは体が一歳児であるということ。

幼い体では疲れなどが溜まりやすく行動時間が短くなる。

それではいくら秋葉本人が無限の存在であろうと体が幼子では出来ることが限られてしまうのだ。

そこで秋葉は肉体に縛られず修行が出来る場所、己が自由に出来る空間、精神世界へとやつてきた。

……のだが。

「何もない……だと」

精神世界は秋葉がよく修行に使用する世界でありそれに応じた内装となつていて。しかし今の状態はどうだろう。

辺りは一切何もない。

もはや別の空間と言つても過言ではない。

「あの気配が強い……いるのか……」

秋葉の言うあの気配とはこの体となつて初めて感じた気配のことである。

秋葉の近くにありながら確認することの出来ない気配。

己が知る中で例えるなら龍、ぞくにドラゴンと呼ばれる者たちから感じ取れる特有の
氣配。

今まで体と力が馴染みきらず探すことが出来なかつた。

だが今は違う。この空間の奥、はつきりと感じ取れる。

「つたく、誰かは知らんが覚悟するが良い。今の私は少し機嫌が悪い」

そう言つて空間の奥、暗き闇の中へと歩みを進めた。

しばらく進むと空間が一変した。

燃え盛る炎、見渡す限りの赤。

一面炎の海だ。

「……つま、何もないよりはマシか」

ポツリと呟く。

本物の炎ではないので別に熱いわけではない。気にせず歩みを進める。数歩歩いたところでピタリと歩みを止める。

「初めまして、と言うべきかな赤き龍よ」

振り向きざまに言う。

己が後ろに佇む赤き龍に対して。

赤き龍の帝王こと私、ドライグは焦つていました。

(そんないくらなんでも早すぎる!)

目の前にいる少年、兵藤秋葉は今代の私の相棒となる子。

この子には素質があると思ってはいたけどまさかこんな早くに神器の中にやつてくる

るなんて！

「……おい」

『つひ!?』

めちゃくちゃ怒つてらっしゃる？！

私が今まで感じた事が無いほどの殺気が。

『い、今説明しますんでどうか命だけわつ！』

とりあえず刺激しないようにしよう。

目の前の赤い龍が突然

『い、今説明しますんでどうか命だけわつ！』

と言った。

「いや、命を取ろうというわけではないから落ち着け」

とりあえず目の前の龍を落ち着けせる。

どうも機嫌が悪かつたためか無意識に殺気を出しすぎたようだ。

龍は落ち着くと少女の姿になつた。

赤い髪と緑色の瞳を持つ美少女と言える容姿だ。

（人の姿になれるという事はかなり高位の龍か）

「で、お前は誰だ。何故私の中にいる」

『ええっと、私はドライグって言います。何故あなたの中にいるかというと神器があなたに宿っているからです』

「神器？」

『ああ、まずそこから説明します』

神器とは簡単に言うとこの世界の聖書の神が作り出した道具のようなものらしい。

その中でも『神滅具』ロンギヌスと呼ばれるものが13種存在し神をも殺せる力を持つと言う。

ドライグもその中の一つ赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアであり、二天龍の魂も封じられているらしい。

「ん？ ドライグは元々二天龍の片割れなのだろう？ なぜ神器に封じられている」

『あはは、昔は少しやんちゃしてまして』

少し遠い目で言う。

どうやらその昔理由は忘れたが二天龍のもう片割れである白龍皇アルビオンと壮大な喧嘩をしたらしく、それがたまたま三つ巴の戦争をしていた悪魔、堕天使、神達を巻き込み反感を買ってしまったようだ。

「そして逆ギレした挙句、相打ちとは言え神器の中に封じられたと？ あほか」

『いやあ、面白ない』

神器に封じられて以来同じく封じられたアルビオンとの殺し合いの関係は続いているようで歴代の赤龍帝、白龍皇は代々殺しあつてきただらう。

面倒だな。

「まあ色々言いたい事はあるがとりあえずこれから長い付き合いになる。よろしく頼む」

そういうながらドライグの頭を撫でる。さらさらとした手触りのいい髪だ。

『こちらこそよろしくね相棒!』

満面の笑顔でそう返してくるドライグ。

色々と長い付き合いになりそうだな。

その後私の身の上を説明したらひどくビックリされたと言つておく。

紫藤イリナ

ドライグと初めて会った時より二年の時が過ぎ、三歳となつた。

肉体の年齢が二歳になると同時に私は本格的修行を始めた。

その理由は赤龍帝の籠手だ。

所有者の力を10秒毎に倍化したり、倍増の力を他者に譲渡することが出来る
ロンギヌス
 ブレス テッド・ギア
 神滅具。

「ふんッ！」

『ぎやふんっ!?』

そのため度々籠手の扱いに慣れるためドライグと実戦に近い模擬戦を行つていたの
 だが……。

「もうドライグじや相手にならないか」

二年前の最初頃ならともかく今では私が圧勝してしまう。
 もしかして二天龍つてこの程度？

『違うからね!?』

「おつ、復活した」

先ほどまで伸びていたドライグが怒涛の勢いでこつちに来た。

姿は先ほどまでのドラゴンではなく赤髪の美少女の姿だ。

『私が弱いんじやなくて秋葉が異常に強すぎるの！』

「いや、これでも全力の三割にも満たないんだが……」

肉体の成長により無限の力が体にある程度馴染んだ。

しかしそれでもまだ全体の三割ほどしか力を出せない。（それでもドライグより圧倒的に強いが）

『私を片手で吹っ飛ばすのはまだ良いよ？でも歴代の所有者を瞬殺するのはどういう事かな？』

と言つてドライグが指差す先、人が山の様に積み上げられていた。

老若男女様々な人物が屍の如く倒れ伏している。

彼らは歴代の赤龍帝であり、この神器の中に留まる残留思念である。

残留思念である彼らだがきつちり会話できるだけの意思を持ち合わせている。

最初こそ一言も喋らなかつた彼らだが、私が戦いを挑み戦闘を繰り返した結果昔の気

持ちがよみがえつたらしく私に勝負を挑んでくる。

昔と比べ皆随分と喋るようになり明るい顔も見せるようになつた。

皆戦い方が様々なので良き練習相手になる。

『秋葉』

「ん？・どうしたドライグ」

『そろそろ戻らないの？ 今日はあの子が来るんでしょ？』

『そうだったな』

『ドライグに言われ思い出した。』

『ドライグ、私は戻る。後片付けは頼んだ』

『そう言いつつドライグの頭を撫でる。』

『うん』

気持ちよさそうに目を細めながら返事をする。

それを確認し私は現実世界へと意識を戻した。

ピンポン

「ん、来たか」

私が現実世界に戻ると同時に家のチャイムがなつた。

『秋葉～、イリナちゃん来たわよ～』

「分かった。今行く」

自分の部屋を出て玄関に向かうと母親ともう一人、栗色の髪の少女が立っていた。
「こんにちは秋葉くん」

「いらっしゃい、イリナ」

彼女の名前は紫藤イリナ。

お隣に住む紫藤家の長女で私の幼馴染。

服装からして一見少年にも見えるがれつきとした女性だ。

私の見立てでは成長すればかなりの美少女になると思う。

「秋葉くん行こう！」

「分かってる」

彼女は私に良く懐いている。昔将来の夢って何？って聞いたら

『秋葉くんのお嫁さんになる！』

つて即答されたぐらいには。

ちなみに今もその夢は変える気がないらしい。

イリナに連れられてやつてきたのは近所の公園。

昔からここでよく一緒に遊んでいる。

「今日は何して遊ぶんだ？」

「ううんとね、かくれんぼが良い」

「かくれんぼか。分かつたじやあ私が鬼をやるからイリナは隠れて」

「今日こそは負けないよ！」

「じゃあ十数えるから」

そうして私は十数え始めた。

私の名前は紫藤イリナ。

今日はいつも一緒に遊ぶ秋葉くんと一緒に公園に来た。

秋葉くんは私が小さい頃から一緒にいる男の子でよく一緒に遊んだりする。

そんな私は秋葉くんのことが好きだ。優しくてかつこいい彼を私は好きになつてしまつた。

将来秋葉くんのお嫁さんになれたら良いな。

「ここなら見つからないよね」

秋葉くんとかくれんぼしている私はこの前見つけた秘密の場所にいた。

公園の端つこにある使われていない建物。いっぱい隠れる場所があることは私のお

気に入りの場所なの。

いつものように入り隠れようとしたとき
バンツ

「えつ……？」

急に扉が閉まつた。

「あ、開かない!?」

いくら押しても開かない。

カラカラカラカラカラカラ

後ろの方から変な音が聞こえた。

「ひいっ?!」

『コドモ。キタ。コドモ、ウマイ。クウ』

後ろに振り向くとそこにいたのはクモのような化け物だつた。
食うつて私を食べようとしてるの?!

「いやあ！」

いくら押しても扉は開かない。

化け物はゆつくりと近づいてくる。

私はあまりの恐怖に座り込んでしまつた。

(死にたくないよ！助けて秋葉くん！)

ズガアアアアアン

「……え」

『グギヤアアアア！？』

突然大きな音が響いた。それと同時に化け物が吹っ飛ぶ。
「間に合つたか」

私の前に誰かが立つ。

私はその人を知っていた。

私が一番好きな人。

「秋葉くんっ！」

――――――――――――

「遅くなつたな。大丈夫かイリナ？」

「うん」

私は抱きつくイリナをなだめながら無事を確認する。
しかしこのタイミングではぐれ悪魔とはな。

『どうも前々から潜んでいたらしいね』
気づけなかつた私の失態か……。

『グギュガ』

「しぶとい奴だ」

壁を破壊すると同時に吹っ飛ばしたがまだ生きていたようだ。

「イリナ、ここで少し待つていてくれ」

「うん。でも秋葉くんは？」

心配そうに私を見るイリナ。

「心配するな。化け物退治するだけさ」

そう言つて頭を撫でる。

「さて、よくもイリナを泣かせてくれたな」

蜘蛛型のはぐれ悪魔に向き直る。

「いくぞドライグ！」

『うん！』

右手が赤いオーラに包まれ籠手が出現する。

「それともう一つ！」

秋葉の声に呼応するかのように右手のひらに膨大な量の光が集まる。

つるぎ

膨大な量の光は形を成し光り輝く剣となる。

右手に握られた穢れ無き純白の剣。

その剣の名は聖王剣。ありとあらゆる闇を祓う秋葉のみが持つことが出来る最強の

聖劍。

バランス・ブレイク

「禁手化」

『Welsh Dragon Over Booster!!!!』

籠手の宝玉が光り輝く。

光が消えると右手の籠手が先ほどとは別形状に変化していた。

『Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!』

『Transfer!』

籠手だけを禁手化状態にすることによつて10秒制限を克服し、通常状態のブース

テツド・ギアの汎用性を最大限に高めた禁手化の亞種だ。

そして高めた力を聖王剣に譲渡する。

コオオオオオオオオオ

聖王剣から膨大な量の光が溢れる。

『グギュギュツ!』

もうほとんど知能は残っていないようだが本能で危険を感じ取ったはぐれ悪魔は逃げようとする。

「逃がさん」

秋葉は瞬時に跳躍しはぐれ悪魔に瞬時に接近する。

『グギヤギヤギヤツ！』

はぐれ悪魔は秋葉に対してその体を貫こうと背中から触手状の物体を伸ばす。

「遅い」

しかし秋葉はそれを難なく切り捨てる。

『グガガアアアア?!』

「これで終わりだ」

聖王剣を振るいはぐれ悪魔の体を真つ二つに切り裂く。

光はこの世界の悪魔にとつて毒。切り裂かれたはぐれ悪魔は光となつて消えた。

私は聖王剣を光に戻しイリナの元まで戻ると手を差し伸べる。

「帰ろっか」

「うん！」

その時のイリナの顔はとびつきりの笑顔だつた。

その一年後、イリナは父親の仕事の関係で英国に行くことになった。

「あつちでも元氣でな」

「うん。それでね秋葉くん」

「なんだい？」

するとイリナは顔を近づけ

チユツ

私の頬にキスをした。

「私、絶対あなたの隣に立てるようにならんばるから！」

突然の告白に少し驚いたがすぐに微笑み返す。

「うん、待ってるよイリナ」

「うん！」

彼女もまた笑顔で返した。

『行つちやつたね』

「ああ」

『彼女どうなるかな』

「イリナは言つたらやり通す子だ。すぐに追いついてくるさ」

『ふふ、楽しそうだね』

『楽しいさ。これだから人間はやめられない』

出会い

「本当に空は紫なんだな」

『でしょ?』

私は今回冥界に来ている。

理由は簡単、私の興味本位だ。

私も前世では冥界に住んでいたがあの世界における冥界は人間界と同じ場所にあり
唯大陸が違うだけだった。

なので空も青かつたし植物もほぼ同じものが生えていた。

「異界にあるだけあってこうも違うものか」

紫色の空、人間界とは違う動植物。

気候条件などはほぼ一緒なのにこれほどの差があるのか。
色々と観て回るため森の中を歩く。

『んく、久しぶりの冥界だ♪♪』

「楽しそうだなドライブ」

『こつちに来るのは神器に封じられて以来だからね♪』

「歴代の赤龍帝は誰もこちらには来なかつたのか」

『ベルザードやエルシヤ以外は白龍皇の打倒にしか当時は興味が無かつたから。秋葉ほど色々見て回る事は無かつたね』

「ふーん」

ちなみにドライグ今言つたベルザードとエルシヤの両名は男性と女性で歴代最強の赤龍帝だつたらしい。

普段は神器の奥深くにいて私もまだ一度しか会つていない。

チチチチ

クーン

森を歩いていると色々な動物が寄つてきた。

「ふふ、中々人懐つこいやつらだ」

『秋葉つて動物に好かれやすい体質なんだね』

「……ああ、この間は野良猫に群がられて大変だつたな」

以前公園に座つていたとき猫が一匹寄つてきたと思つたらいつの間にかあれよあれよと増えてた。

「アレはさすがに……ん？」

『どうしたの？』

「泣き声…………？」

『…………』

微かだが確かに聞こえた。

「あっちか」

私は微かに聞こえた声の方向へと飛んだ。

私の名前はリアス・グレモリー。

今日はお家の近くにある森の中に来て いたのだけれど……

「……どうお…………？」

少し奥まで来すぎてしまつたみたい。

帰り道が全然分からない。

「えつぐ、えつぐ、ぐすん」

どれだけ歩いたかは分かない。

むしろさらに奥へ来てしまつた様な……

「ぐす、もうつかれたよお……」

その場に座り込んでしまう私。

「あ、見つけた」

「え……？」

でも私はこの時幸運だつたのかもしれない。
だって

「何でこんな所で泣いているんだい？」

彼に出会えたのだから。

森の中で泣いていた少女。

彼女はリアス・グレモリーと言う名らしく、道に迷つたらしい。
歳は私より一歳年上。

最初見たとき年下かと思ったのは内緒である。

(それについても『グレモリー』か)

グレモリー。

ゴエティアにおいてソロモン72柱の一角、公爵の地位を持ち老若問わず女性の愛をもたらす力を持つた悪魔。

鮮やかな紅い髪を持つ彼女は私の手を握り笑顔を私に見せてくれる。
きっと将来は良き女性になるだろう。

「ねえねえ、秋葉は何でこの森にいたの?」

「ん? ちょっと用事でね」

今纏つている気を悪魔のそれに合わせてるので人間だとはばれていない筈。
「リアスの髪は綺麗だね」

「秋葉の髪も綺麗だよ?」

「ははは、ありがとう」

イリナの時も思つたがこういう純粹な気持ちは自分には少し眩しい。
自分が過去にしてきたことを踏まえると尚更だ。

『秋葉、今は今、昔は昔だよ。気にしなくてもいいと思うよ』

(そうだな。ありがとうドライグ)

『どういたしまして♪』

さて、リアスと話をしながら彼女の持つ魔力と似た魔力を探し歩くこと十分ほど。

「お母様っ!」

どうやら見つかつたらしい。

リアスはそのまま女性の方へと駆けていく。

あれがリアスのお母さんなのだろう。確かにリアスによく似ている。

(さて私も帰るとしよう)

もう用は達した。私はリアスを見届けるとその場から姿を消した。

『良かつたの？あのまま帰っちゃつて』

「良いんだよドライグ。あの場に私は邪魔なだけだ。それにまた会えそうな気がするし
な」

『ふふ、あの時の秋葉お兄ちゃんみたいだつたよ』

「ふ、そうか」

秋葉とリアスが再び再開するのはまだ先の話である。